

平成 30 年 4 月 15 日現在

機関番号：34416

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07350

研究課題名(和文) 日本近世期における礼楽研究 朱子学派と徂徠学派の楽律研究を中心として

研究課題名(英文) The Study of Reigaku in the Early Modern Japan, with Special Focus on the Study of the Neo-Confucian School and the Sorai School's Musical Temperament

研究代表者

榎木 亨 (KAYAKI, TORU)

関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員

研究者番号：10782310

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本近世期における礼楽研究、とりわけ朱子学派と徂徠学派の楽律研究について、検討を行なった。

徂徠学派の楽律書としては、荻生徂徠『楽律考』がよく知られているが、本研究では太宰春台『律呂通考』に着目し、同書が『楽律考』の入門書としての役割を担っていたことを解明した。また、朱子学派では、同学派の中でも最も体系的に楽および楽律研究を行なった蟹養斎について検討した。その結果、養斎が『律呂新書』等の文献を読むだけでなく、日本の宮廷音楽や俗楽についても研究を行なっていたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research examines the study of Reigaku in the Early Modern Japan, especially the study of the Neo-Confucian school and the Sorai school's musical temperament.

Ogyu Soarai's "Gakuritsukou" is well-known as the book of Sorai school's musical temperament, however, this research focus on Dazai Shundai's "Ritsuryo Tsukou" and clarify that the book is an introduction to "Gakuritsukou". The study of music and musical temperament by Kani Yosai is one of the most systematic study in the Neo-Confucian school. He is not only to read a book (e.g. "Ritsuryo Shinsho") but also to study about Gagaku (Japanese court music) and Zokugaku (worldly music).

研究分野：日本思想史

キーワード：礼楽 楽律学 朱子学 徂徠学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者が平成 25 年度に日本学術振興会特別研究員 (DC1) として採用された研究課題である「近世日本における中国音楽研究 『律呂新書』を中心として」を発展させ、日本近世期における礼楽研究、とりわけ朱子学派と徂徠学派の楽律研究について、儒教思想と音楽実践の複眼的な観点から比較検討することにより、両学派の礼楽論の特徴を明らかにしたものである。

日本近世期における礼楽研究については、これまで徂徠学派、とりわけ荻生徂徠の礼楽観や、その著作である『楽律考』『楽制篇』等を中心として研究が行なわれてきた。しかし近年、当時の思想界において徂徠学派と双壁をなしていた朱子学派による礼楽研究についても、徐々にその実態が解明されつつある。

そこで、本研究では先行研究において蓄積されてきた成果を活用し、両学派の礼楽研究、とりわけ楽律研究を中心として比較検討を行なうことにより、両学派の研究に見られる特徴の解明を試みた。

2. 研究の目的

(1) 朱子学派において行なわれていた『律呂新書』研究では、同書に見られる楽律論を基礎として日本雅楽を改良し、儒者が理想とする古楽を復興することがその目的の一つとされていた。同様に、徂徠学派においても荻生徂徠が『楽律考』を著わし、古楽の復興を希求していたことが知られている。

そこで、本研究では朱子学派から中村惕斎『筆記律呂新書説』・斎藤信斎『楽律要覧』・蟹養斎『読律呂新書記』の三点、徂徠学派からは荻生徂徠『楽律考』・太宰春台『律呂通考』の二点を対象として分析を行なうことにより、両学派の楽律論に見られる特徴、さらには、日本雅楽ならびに古楽に関する認識の相違について解明する。

(2) 日本における『律呂新書』研究の開祖として位置づけられる中村惕斎は、同書について精緻な実証的研究を行なったものの、楽論ならびに礼楽論については具体的な著作を残すことはなかった。しかし、惕斎の弟子である斎藤信斎の『楽律要覧』や、蟹養斎の『楽学指要』および『日本楽説』などでは、楽の機能や礼楽論において楽が果たすべき役割などが説かれている。また、徂徠学派でも、荻生徂徠が『楽制篇』や『琴学大意抄』などにおいて、楽論や礼楽論について言及している。

そこで、本研究では上記の文献を対象として比較検討することにより、両学派の楽論および礼楽論の思想的特徴について解明する。

3. 研究の方法

本研究では、朱子学派と徂徠学派の楽律研究に焦点を当てることにより、儒教思想と音

楽実践との複眼的な観点から研究を行なった。前述の目的を達成するため、まずは分析対象となる文献の収集を実施した。収集した文献は、次のとおりである(ここでは主な文献のみを挙げている)。

< 朱子学派 >

中村惕斎『筆記律呂新書説』『修正律呂新書』『三器通考』『仲子語録』『惕斎先生文集』
斎藤信斎『楽律要覧』
蟹養斎『読律呂新書記』『楽学指要』『制律捷法』『日本楽説』『養斎先生文集』『非徂徠学』『辨仁斎徂徠二先生学書』
中村習斎『読律呂新書記』『読儀礼経伝通解』

< 徂徠学派 >

荻生徂徠『楽律考』『楽制篇』『楽曲考』
太宰春台『律呂通考』『三器考略』

この中でも、太宰春台『律呂通考』についてはこれまでほとんど研究されていないため、特に重点的に版本を収集し、諸本間における文字の異同の確認と内容分析を実施した。

また、朱子学派では蟹養斎がその理論構築に意欲的であったことから、養斎の文集および書簡などの関連資料についても収集することにより、養斎の思想的特徴を明らかにするとともに、養斎の思想における楽論および礼楽論の意義やその役割についても検討を行なった。とりわけ、養斎に関する資料が多数所蔵されている名古屋市蓬左文庫については、現地に赴き資料調査を行なった。

さらに、両学派の楽論および礼楽論の差異について明らかにするため、朱子学派の斎藤信斎『楽律要覧』と蟹養斎『楽学指要』『日本楽説』、徂徠学派の荻生徂徠『楽制篇』と太宰春台『律呂通考』を取り上げ、これらの文献に見られる両学派の楽論および礼楽論に関する言説を整理することにより、その相違点について検討した。

4. 研究成果

(1) 太宰春台『律呂通考』について

徂徠学派を代表する楽律書としては、荻生徂徠『楽律考』がよく知られているが、現存する版本を確認すると、多くの場合、同書とともに荻生徂徠『楽制篇』および太宰春台『律呂通考』が合冊されていることがわかる。このように、『楽律考』『楽制篇』『律呂通考』が合冊されている場合、『楽制篇』の最終頁に「右楽律楽制二篇並徂徠先生遺書獲諸叔達氏而謄写之 寛保癸亥九月念二日 春臺識」との識語があり、春台が徂徠の弟である荻生北溪より『楽律考』ならびに『楽制篇』を借り受けて謄写したということが記載されている。そして、この識語の後に『律呂通考』が配置されている。

徂徠の『楽律考』および『楽制篇』と春台の『律呂通考』を合冊することが春台の意向

によるものか否かは判然としないが、少なくとも、これら三点の著作が合冊されたものが現在でも数多く確認できるということは、何らかの意図をもって合冊されたと言えるだろう。そこで、本研究では『律呂通考』の内容を検討してみたところ、同書は楽律学に関する基礎的な知識の紹介を行なう部分（「五音定数」「十二律」「隔八相生」「十二律相生算法」「五声六律十二管還相為宮」と、徂徠の楽律論について簡単な解説を行なう部分（「日本十二調」「人声十二等」「古譜」）から構成されていることがわかった。よって、同書は徂徠の『楽律考』の入門書としての役割を担っていたのではないかと考えられる。実際、『楽律考』を理解するためには楽律学に関する基礎的な知識が必要となるが、同書にはそうした楽律学の基礎を紹介するような記述は見られない。そのため、春台の『律呂通考』は『楽律考』の理解を助けるべく著述されたのではないかと考えられる。

これまでに確認した『律呂通考』（計13点）を比較・検討した限り、諸本間に大幅な文字の異同は見られなかった。また、所蔵先の事情等により、すべての版本を収集することができなかったため、諸本間の系統関係を特定するまでには至らなかった。この点については、今後も継続して調査していきたい。

『律呂通考』（調査済）

- ・国立公文書館（199-0106 デジタルアーカイブ資料）
- ・西尾市岩瀬文庫（146-65）
- ・東京大学駒場図書館（七/い/57）
- ・東京芸術大学附属図書館（W768.2/R9, W768.121/0-5, W768.2/G28）
- ・九州大学附属図書館（木文庫/和書/1409, 桑木文庫/和書/1410, 雅俗文庫/00漢学a/ガク）
- ・筑波大学附属図書館（口 870-7）
- ・龍谷大学図書館（761/513-W）
- ・関西大学図書館（L24/1-688, L21/3/712）

合冊の場合、外題は『楽律考 全』となっていることが多い。また、国立公文書館・東京芸術大学附属図書館（W768.2/R9）・龍谷大学図書館の3点は合冊ではなく、『律呂通考』の単行本である。

（2）蟹養斎の楽・楽律研究について

日本近世期の楽律研究は、中村惕斎による『律呂新書』研究に端を発するが、日本朱子学派による楽および楽律研究という観点から見ると、蟹養斎による研究が最も体系的なものであるといえる。

養斎は『楽学指要』において、当時の儒者たちが徒に修己のみに心を尽くし、治人の重要性を認識していないことを危惧したため、礼楽の復興を試みたと述べている。しかし、養斎は同書において自らの理想を述べているわけではない。

『諸生階級』は養斎の門人たちの必読書で

あり、養斎の学問観が顕著に示された小論であるが、同書の「久学」において「六経」に言及した際、「楽は全書なし、大躰を儀礼経伝通解にて心得、又律呂新書をすまし、我国に伝はる唐楽をすこしわきまへ考あわすべし」と述べ、『楽経』が失われてしまった「楽」については、『儀礼経伝通解』および『律呂新書』を手掛かりとして理解するとともに、日本に伝わる「唐楽」（雅楽）についても関心を持ち、これに親しむことを求めていることが確認できる。このように、文献の理解だけではなく、そこから得られた知識に基づき実践にも目を向けることは、養斎の教育論の特徴として知られているが、楽においても同様の傾向が見られることが確認できる。

さらに、養斎は楽の実践に対応するべく、『日本楽説』や『猿瞽問答』『猿楽論』などを著わし、雅俗の両面に目を配りながら当時日本で演奏されていた楽の分析を実施し、人々が親しむべき楽を探究していたことが判明した。つまり、養斎は礼楽の再興という理想を掲げるだけではなく、その実現に向けて具体的な方策の提示や行動を起こしていたことが明らかとなった。

（3）今後の展望

日本近世期の雅楽は、儒教の礼楽思想の影響を受けて変容したということはよく知られているが、具体的に「いつ、どこで、誰が、誰に、どのような礼楽思想を提示し、どのような変化が生じたのか」ということについては、ほとんど明らかにされていない。とりわけ、儒者と雅楽との関係については、一部の儒者による言説が断片的に取り上げられているだけであり、体系的な研究は全く行われていない。また、儒者たちと楽人たちの関係や、彼らを取り巻く人々の交際関係についても、十分に研究が尽くされていない。

本研究においても、徂徠学派が日本の宮廷音楽（雅楽）を積極的に評価していたのに対して、朱子学派は当初「隋唐燕楽」として雅楽ではないとの見解を示していたが、養斎は「雅楽」も少しは伝来しているとの見解を示し、徂徠学派と同様、日本の宮廷音楽を積極的に活用しようとしていたことを明らかにするとともに、武家の式楽である猿楽の分析・三味線をはじめとする「俗楽」の批判など、思想的には対立する徂徠学派と朱子学派の間にも、多数の共通点が見出せることが明らかになった。ただし、これらの研究成果も結局は一部の儒者たちの言説を分析するに止まっており、未だ全体像を把握するまでには至っていない。

以上のことから、今後は本研究により得られた成果を基礎として、より一層対象範囲を拡大することにより、全体像の把握を目指していきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔学会発表〕(計5件)

榎木 亨「鈴木蘭園の楽律論 『律呂辨説』
を中心として」、京都市立芸術大学日本伝
統音楽研究センター 共同研究「近世日本に
おける儒学の楽思想に関する思想史・文化
史・音楽学的アプローチ」、2018

榎木 亨「蟹養斎の礼楽思想について」、
日本思想 史学会 2017 年度大会、2017

榎木 亨「日本近世期の儒者と楽」、関西
大学東西学術研究所 第8回研究例会<東ア
ジア宗教儀礼研究班>、2017

榎木 亨「日本近世朱子学者と楽研究」、
朱子『家礼』学術研究会、2017

榎木 亨「日本近世礼楽研究 以楽的实践
を中心」、国際儒学フォーラム 2016、2016

〔図書〕(計1件)

榎木 亨、東方書店、『日本近世期におけ
る楽律研究 『律呂新書』を中心として』、
2017、297

6. 研究組織

(1) 研究代表者

榎木 亨 (KAYAKI, Toru)

関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員

研究者番号：10782310